松　風

福島県公立学校退職校長会

西白河大会開催…… 1
講演・体験発表…… 2～3
大会風景・大会宣言…… 4
「松風」第200号特集…… 5～6

〒960-8107 福島市浜田町4-16 富士ビル2階
TEL（024）534-5411
FAX（024）531-1195

第六十回福島県公立学校退職校長会

西白河大会　開催

第六十回福島県公立学校退職校長会西白河大会は、令和八年六月九日(火)、十六支部約百八十名の会員の参加のもと、白河市の「シン鹿島」において開催された。

大会会長あいさつ

福士　寛樹



本日、多くのご来賓のご臨席のもと、節目となる第六十回福島県公立学校退職校長会西白河大会が盛大に開催できることは、この上ない喜びである。

ここ数年、学校の統廃合による学校数の減、退職年齢の引き上げ、さらには価値観の多様化などにより、入会率が五十％を割り込んだ。多忙を極める学校現場の応援団としてよりよい教育環境の構築に向け支援するとともに、要望の成果や役職定年後の再就職や資産形成、年金等の有益な情報を提供するなど入会のメリットを可視化していく。

本県教育界における小学校の教員採用試験の低倍率、加配・補充教員の慢性的な不足の問題に対しては、本会として組織的に学校や教育委員会等を支援するシステムを提案したい。

現在、東北地区退職校長会協議会会長と全国連合退職校長会副会長として、文部科学省を訪問し、堀野晶三教育基盤審議官に復興予算の継続、教育予算の拡大、教員の処遇や教育環境の改善などを直接訴えてきた。

本日、この大会では、鈴木支部長さん、栗林前支部長さんのリーダーシップと関係支部の協力・支援態勢のもと、東日本大震災時に被災した小峰城の修復に尽力され、熊本城の修復にもそのノウハウを伝授している貴重なご講演、安達支部、北会津支部、相馬支部の三名の先生方の専門性を活かした体験発表、いずれも楽しみである。

本日ご参会の皆様方のご健勝とご多幸、そしてさらなるご活躍をお祈り申し上げる。（要旨）

大会実行委員長あいさつ

鈴木　且雪



本日は、県内各支部からたくさんの会員の皆さんに参加いただき、心から歓迎と感謝を申し上げる。

本日を迎えるまで、県の福士会長はじめ、県中南各支部更には、昨年度の会津大会の実行委員の皆様から多大なるご支援をいただき、感謝に耐えない。

役員のなり手不足などの現状から、支部運営は非常に厳しい状況にある。そのような中、県大会を開催することになり、実行委員会を立ち上げ、会議を重ねたことにより、支部会員同士の結びつきが強まり、組織の必要性や運営への関わり方を改めて見直す重要な機会となった。

持続可能な地域を担う子どもたちを育成することは、我々にとっても重要な役目であると考え、大会宣言の一項に盛り込んだ。

今大会の講演や体験発表から、少しでも心に残るお土産をお持ち帰りいただければ幸いに思う。（要旨）

西白河大会順序（10：30～15：00）

Ⅰ　開　会　式
Ⅱ　講　　演
「史跡小峰城跡の地震被害から復興への姿」
鈴木　　功氏
Ⅲ　昼食・懇談
Ⅳ　体験発表（安達・北会津・相馬支部）
Ⅴ　大会宣言
Ⅵ　閉　会　式

講演

史跡小峰城跡の地震被害から復興への姿

白河市建設部文化財課
文化財専門研究員
鈴木　功氏



小峰城の歴史

小峰城は、南北朝時代に結城親朝が現在地に城を構えたのが始まりである。

江戸時代の寛永四年に白河藩が成立し、初代藩主となった丹羽長重は奥州の押さえの城としてふさわしい、随所に石垣を多用した近世城郭に大改修した。

丹羽氏の後、徳川の親藩・譜代大名が白河を治めていたが、慶応四年の戊辰戦争白河口の戦いにより、焼失落城した。

東日本大震災での被害

平成二十二年八月に小峰城は、その価値が評価され国史跡の指定を受けた。

しかし、その七か月後の平成二十三年三月の東日本大震災により石垣が十か所崩落する被害に見舞われた。さらに、石垣の崩落は免れたものの大きく変形し崩落の危険が高い箇所も存在したことから、最終的に十七か所について石垣の災害復旧工事を行うこととなった。

文化財としての石垣修復

文化財としての災害復旧工事にあたり、以下のような方針を掲げて行った。

①江戸時代の石垣構築法に倣う。（伝統工法）
②修復過程を公開する。

文化財石垣修復の基本は、元の石を元の位置に戻すことであるため、崩落した石材一つ一つに番号を付し、崩落前の写真と照合しながら元の位置を特定した。さらに、施工図を作成し高さ管理を徹底して崩落前の姿の再現に努めた。その他、旧来の地形の把握や崩落原因の究明など、石垣修復の手順を構築しつつ実践した。

こうした小峰城での取組は、文化財石垣修復のモデルケースと評価され、自然災害で石垣崩落被害に遭った熊本城や丸亀城などの復旧にも活かされている。

未来へ

石垣修復を終え、現在は新たな小峰城の価値を高め、城郭としての威容を整えるため、清水門の復元に取り組んでいる。今年度完成予定なのでぜひその姿を見てほしい。

（記録　大竹　宏之）



石垣修復を終えた現在の小峰城

体験発表１

「石川弾正顕彰会」の創設と活動
知る・活かす・伝える ふるさとの歴史と誇り

安達支部　日下部善己



これは、私の来し方を振り返りつつ、先人と大地の多様な歩みを地域の皆さんと共に探る「ふるさと再発見」の旅である。

ふるさとの伝統を知る

百目木は阿武隈山中の小さな町だが、石川弾正という殿様がいた、お城の「石川様の坪石」の周りを息を継がずに三度回ると黄金の鳥が出る、安藤広重も浮世絵に描いている、と子供の頃によく聞いた。本当か？

石川氏と百目木城を調べる

鎌倉末期から奥州石川氏支族が塩松（二本松市東部）を開拓経営し生産基盤や生活インフラを整備した。この塩松石川氏の戦国末期の当主が弾正光昌で百目木城を政治拠点とした。歌川広重も村名主渡邊半右衛門の求めで『陸奥安達百目木驛八景圖』を制作、伝説の多くは史実であった。

「石川弾正顕彰会」の設立発起人となる

平成二十四年、地域発展の基盤を築いた郷土の偉人を次世代に伝えるために同士と共に石川弾正顕彰会を創設した。活動は、塩松石川氏（石川弾正）顕彰祭（ふるさとの名曲、記念講演、史跡訪問）、例会、登城路清掃、会報『塩松東物語』刊行である。二本松市や市教委の後援を受け、岩代観光協会、同地域集落支援員等との連携も図っている。

新たな顕彰事業に取り組む

さらに、九十年前の『百目木小唄』の復活演奏（大正琴サークルももせ）、イメージキャラクター「いしダンくん」発表、「百目木城跡説明板」制作、石川昌



いしダンくん

長氏（弾正光昌後裔）の講演『石川弾正公と私』、市立旭小学校の地域学習への協力等、みんなで温故知新を楽しんでいる。

「明日を拓く今日という日は、昨日から続いている今日であることを忘れてはならない」との想いで、今後も先人の業績を若い世代に繋ぐ活動を続けたい。

体験発表2

肉眼では見えない世界に迫る

北会津支部　滝沢　玲子



二十三種類にもなってしまった諸活動の隙間時間を使って、本当にやりたいことを行い、肩の力を抜いて、何とか生活を楽しんでいる。その一端を紹介する。

一　顕微鏡で見るコケ植物

鶴ヶ城公園の土塁のエゾスナゴケを始め、コケ植物は変水性を持ち、地球上のいたる所（氷中と海水以外）に生育でき、薊の中でできる胞子で仲間を増やす。

雄器床の形が銭に似るゼニゴケは、気室により乾燥から守られ、有性生殖と無性芽による生殖をする。庭のゼニゴケ取りは要注意。

樹幹に着生するカラヤスデゴケは、三種類の葉を持ち乾燥対策をし、胞子を一瞬で飛ばし、薊が落ちる。

乾燥している鶴ヶ城公園ではあるが、五十三種類以上のコケ植物が生育し、生活環境の異なる都会のコケ・人里のコケ・自然豊かな所のコケが同居している。

二　双眼鏡で見る野鳥

日本で繁殖する夏鳥のサンコウチョウとは四年間かけて、実のなる木の近くで雄・雌・幼鳥を観察した。

クマタカのクマッタ（筆者の付けた愛称）とは、親離れの時から、カラスやカケスに攻撃される若鳥の時、雌と番になったらしい時まで観察した。クマッタがんばれ。

水鳥のバンとは、最初の交尾、魚を雌に運ぶ雄、卵から孵った幼鳥を世話する親鳥、幼鳥の前で交尾する親鳥とおおらかとも言えるバンの子育てを観察した。

三　文書に載る不明な世界

山都町史（現在喜多方市）に「菅沼湿原は低山帯にある貴重な湿原の一つである」「カクマ谷地湿原とトキソウ谷地湿原がある」との記載はあるが、その場所は不明である。山都町在住の知人の一人から「かつて黒森山登山の帰りに行ったことがある」との情報をもらい、雨の中地図を頼りに道なき急斜面を登り、怪我をしながらも、二回の挑戦で二つの湿地を見付けることができた。その位置情報と観察した植物は文書に記載し、後世に残した。

これから後二十年程、まず身軽になって、センス・オブ・ワンダーで、面白い・かわいい・不思議だということを撮影し続けたい。

体験発表3

生かされた命を生きる
～防災で紡ぐ未来（いま）～

相馬支部　髙橋　誠



未曾有の出来事である東日本大震災。私は相馬海浜自然の家勤務時に遭遇した。その被災体験から『生かされた命』という思いを強く抱いた。

体験からの「おもい」を紡ぐ防災への取組

①学校現場で

被災を受けた年の八月から学校現場に復帰。真っ先に行ったことは、災害時の命に直結する行動力を身につけるための避難訓練の見直し。より実践的・実効的な訓練を企画し、計画的・継続的に実践・指導を行った。

②退職後、教育委員会で

「防災教育専門員」として勤務。点から線に、線から面へと、地域の防災強靱化を目指して、市内全小・中学校で避難訓練や防災学習の統一的な指導実践の展開を図った。

③職を辞してから

日赤福島県支部の防災教育プログラム指導スタッフの一員として、県内各小・中学校で、日赤制作の青少年赤十字防災教育プログラム「まもるいのち　ひろめるぼうさい」の指導実践に携わる。子ども達が防災の正しい知識と行動力を身につけ、高い防災意識が育つよう指導支援に努めている。

- 日赤奉仕団指導講師、JRC賛助奉仕団員として、各地区赤十字奉仕団の研修の手助けや各小・中学校でのJRC活動の支援に携わっている。
- 防災士として、地域の防災意識の高揚に繋げる地区防災訓練の企画・運営に携わっている。
- 防災学習交流のコーディネーターとして、学習院女子中・高等科ボランティア部と継続的な学びに関わる。震災を知らない未来を担う子ども達に、東日本大震災の惨劇と、そこから得た教訓や災害への備え等について語り伝えている。

これから自分はどう生きるか。生かされた命を無駄にせず、誰かの役に立つ活動を無理なく無理せず、「おもい」を「重い」にならぬよう語り広げる活動を、地道に未来（あす）も続けていきたいと思う。

『永遠の今を夢中に生きる！』と心に刻んで。

大会風景


講　　演


参加者のみなさん


受　　付






交 流 の 様 子

大　会　宣　言

私たち福島県公立学校退職校長会は、創立以来、先人の教育に寄せる熱い思いと献身的な取組を継承して60年を超える歴史を重ねて来た。この間、自らの生活の向上、地域社会の進展、そして本県教育振興発展のため様々な取組を行ってきた。

しかしながら、東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故によって、私たちの生活は大きく様変わりし15年が経過した。落ち着いた生活ができるようになってきてはいるが、それでも被災地区においては、現在もなお事故収束と復興・創生への遠い道のりが続いている。私たちは、「双葉の灯を消さない」よう、今後とも本会を挙げてふくしまの復興･創生の支援活動を続けともに進んでいきたい。

このような中にあって、私たちは本会の存在意義を改めて見つめ直し、組織のもつ力を活かすとともに、これまで積み重ねてきた会員一人一人の経験と知恵を活かし、子どもたちの教育環境の充実、学校支援と、持続可能な地域の人材育成のための教育推進に努めているところである。また、感染症の予防に留意しながら、本会並びに各支部活動を展開している。

ここに、第60回福島県公立学校退職校長会西白河大会の開催にあたり、下記事項の実現に向け、その決意を宣言するものである。

記

一　ふくしまの復興・創生に向けて社会貢献活動に積極的に協力し、一人一人が生きがいを持って生活することができるように努める。

一　さらなる魅力ある会を目指して組織の拡充を図るとともに、本会ホームページ等の情報や各支部活動のよさに学び、支部活動を充実させ、会員同士の触れ合いや支え合いを一層深めるよう努める。

一　未来を担う子どもたちの地域のよさの学びを通して、持続可能な地域を担う人材育成のための教育の推進と教育環境の一層の整備充実について、県並びに市町村教育委員会や関係機関、学校等への働きかけの強化に努める。

一　退職後の生活の再建・安定のために、年金生活が保障され、保険・医療・福祉等の制度がより充実されるよう、関係団体と連携しながら要望活動に努める。

一　感染症の予防に留意して、会員は率先して動き、歩き、笑い、心身を鍛え、健康長寿を目指すよう努める。

令和８年６月９日

第60回　福島県公立学校退職校長会西白河大会

会報「松風」第二〇〇号特集

広報誌 会報「松風」第二〇〇号発行にあたって



福島県公立学校退職校長会
会長　福士　寛樹

福島県公立学校退職校長会は、本県並びに我が国の教育の振興、恩給・年金のスライド制の確立、会員相互の親睦と同志の団結を目的に会員三百八十六名により昭和四十年四月九日に設立されました。その設立総会直後の五月に記念すべき「福島県退職校長会会報」として「広報誌第一号」が発行されました。当時の出来事として敬老の日・体育の日の制定、我が国の総人口が一億人を突破、ＮＨＫの朝の連続ドラマは「おはなはん」。今でも主人公とテーマ曲が脳裏によみがえってきます。

「広報誌」は当初年二回の発行で昭和四十六年ころから年三回の発行となり、第三七号から「松風」となりました。平成十七年からはＡ４版に改訂、平成二十一年度には年間四回の発行になり現在に至っています。「松風」という題字は会員から募集したものを筆耕していただいたと聞いています。このたび、「広報誌　会報　松風」がめでたく節目の二〇〇号を数えました。諸先輩の御労苦と関係する皆様に衷心より御礼申し上げます。

広報誌「松風」は、県事務局と各支部そして会員二千二百余名の皆様とを繋ぐ大切なコミュニケーションツールだと認識しています。会員同士の交流を図るため、いかにタイムリーで有益な記事を会員の皆様にお届けするか、図や写真を多くして見やすく、わかりやすく、読みやすいように広報部が中心となり、発刊を続けています。ここ数年、新入会員の入会率が下がり、会費収入も頭打ち、減少してきています。それに加え、会報印刷費の高騰、郵送料の高騰等が追い打ちを掛け、各支部への郵送や会員の皆様への配達も各支部の皆様のご協力に甘えているのが現状で、この場をお借りして皆様に感謝の意を表します。

昨年度から本県は、東北地区退職校長会協議会の事務局として「東北地区情報」も発行しているため、予算や広報部の負担を考慮し「松風」の発行を年三回にさせていただいています。令和九年は、新入会員の入会率を飛躍的に向上させ、「松風」発行を年四回と考えています。「松風」創刊二〇〇号をめでたく迎えた今、会員増への総力を挙げた取組こそが活動の充実に直結しますので各支部長様をはじめ会員の皆様のご支援・ご協力を切にお願いいたします。

「松風」200号までの歩み（10号ごとに）

号	発行日	主な記事等
1	昭和40年５月	創立総会の様子、設立経過報告、会則等　（１～36号まで福島県退職校長会会報）　※Ｂ５判
10	昭和44年10月20日	就職促進協議会の活動、恩給陳情、昭和44年度本会・支部の役員
20	昭和48年12月１日	特集号－支部展望（本会の歴史、16支部の計画・活動状況）※23号：特集号創立十周年記念
30	昭和52年10月１日	福島県教職員互助会新規加入条件大幅改定　（37号から会報を公募による「松風」に変更）
40	昭和56年３月20日	第４回理事会、56年度の恩給・年金改善案について、支部だより
50	昭和59年７月20日	第二十回福島県公立学校退職校長会郡山大、対県陳情の内容、各支部クラブ活動の実態
60	昭和62年12月20日	税制改革によって年金所得はどのように変わるか、わが支部の特色あるクラブ活動
70	平成２年７月20日	第二十六回福島県公立学校退職校長会保原大会、私の生きがい、陳情要望
80	平成４年11月20日	臨時号「生涯学習はどのようにおこなわれているか」
90	平成７年７月20日	第31回福島県公立学校退職校長会会津若松大会
100	平成10年７月20日	第34回二本松大会、会報「松風」100号の発行に寄せて、随想
110	平成13年７月20日	第37回大熊大会、趣味と生きがい
120	平成16年11月20日	「本会設立40年に思う」、第32回東北地区協議会総会福島開催、要望活動報告
130	平成20年２月28日	退職後の生活（再就職等）に関する調査報告－第３年次－　※122号からＡ４判
140	平成22年11月22日	郷土紹介、随想、クラブ紹介、趣味と生きがい、教育懇談会
※142	平成23年８月23日	東日本大震災特集号（被災・避難会員の声、応援・お見舞い、対応措置等）（※平成23年３月東日本大震災・原発事故発生）
150	平成25年８月22日	第49回東白川大会特集号（講演、体験発表、大会宣言）
160	平成28年２月23日	郷土紹介、随想、趣味と生きがい、全連退創設五十年、事務局だより
170	平成30年８月28日	相馬大会特集号（講演、体験発表、大会宣言）
180	令和３年６月14日	「厳しい社会状況の中で健やかに、しなやかに」、評議員会報告、論壇（※平成２年新型コロナウイルス感染症発生）
190	令和５年11月27日	郷土の祭り紹介、要望活動・懇談会、論壇、随想、趣味と生きがい、特色あるクラブ活動
200	令和８年10月27日	第60回西白河大会特集（講演、体験発表、大会宣言）、「松風」第200号特集

会報「松風」第二〇〇号特集

「ぬくもり基金」の創設



顧問　小野　孝雄

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故により、多くの会員が県内外に避難し、双葉支部も存続が危ぶまれる中、「双葉の灯は消さない」を合言葉に苦しい運営が続いた。

平成二十六年四月、秋田県退職校長会の会長ら三名が本県を訪れ、会員から募った支援金百三十万円を「本会の再建に役立ててほしい」と託された。被災地を案内した際、「生活の匂いや色彩がない」、「津波と放射能のダブルパンチだ」との言葉が胸に深く刻まれ、今でも忘れることができない。

支援金は「ぬくもり基金」と名付け、今日まで活動の力となっている。秋田の皆様への感謝は今も変わらない。温かな善意は、困難の中で私たちを支え続け、今も深い感謝の思いを抱いている。

激動の事務局入局初年と会報「松風」



顧問　室井　君男

原発事故が発生した三月末、車田会長から「大学の方は当分再開できないだろうから、それまで事務局員をやってくれ。」との電話があって、県の事務局に入ることになった。

四月当初から、組織の再建を図るための会議が続く中、「東北地区協議会秋田大会にお前が行って発表してこい。」との命を受けた。

何も分からないまま、秋田での発表の日を迎えることとなったが、放射能禍による過酷な状況や会存続の危機的状況等について発表すると、皆、一様に驚いた。特に、会長の「会報は会員の心を繋ぎ連帯意識を醸成するものだから、この事業は継続しよう。」の言葉で発行された「東日本大震災特集号・松風」を読んで、涙する方もいた。

これを機に、車田会長は東北各県から、「フクシマは、今」と題して講演依頼を受けることになる。まさに、会報に秘められた力が発揮された瞬間でもあった。

松風と駿台雑話



顧問　佐藤俊市郎

「松風」第二〇〇号の発刊、誠におめでとうございます。

私は昭和四十七年に教諭採用され、昭和、平成、令和と約四十年間幾多の教育事情の変遷を潜り抜けて来た。二十一世紀初頭までは、保護者や地域社会、先輩諸兄等の啓発・支援が在り、教育実践が苦ではなかった。だが、東日本大震災等以降頃からか、教育環境に著しい変化が顕在化して来た。中でも特に、管理職の学校経営に大きな影を落とし、それらの苦悩を時々耳にして来た。これらの難しい状況に在って、「松風」を拝受拝読する度に、室鳩巣の「駿台雑話の『老僧と接ぎ木』」を思い起こす。この訓諭は本会の存在意義と軌を一にしている。

会報配信の価値は大きい。毎号が楽しみである。継続は力なり。担当者に感謝する。



「松風」第100号より



会報第１号より

編集後記

このたび、記念すべき会報「松風」第二〇〇号を発行することができました。

本会創設以来、会報を通して、様々な情報や活動状況を会員の皆様と共有して参りました。また、その都度会報のほかに号外や特集を組んで、適宜知らせていました。

第一号～第一九九号まで改めて目を通してみると、諸先輩方の当時の優れた活動の様子や考えが伝わってきます。

今後も、本会の充実・発展のため、会報発行を継続して行きたいと思います。